厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）
（総合）分担研究報告書

拠点病院集中型から地域連携を重視したHIV診療体制の構築を目標にした研究

研究分担課題　地域連携を促進するために解決すべきメンタルヘルスケアについての研究

研究代表者　猪狩　英俊　千葉大学医学部附属病院・感染制御部長　准教授
研究協力者　田代　萌　渡邊 未来　伊藤 菜穂子
千葉大学医学部附属病院　感染制御部　技術補佐員　カウンセラー

研究要旨

メンタルヘルス班は、千葉県内の地域の病院に勤めている心理士が HIV 感染者に対応できるための情報を提供することを目標とした。そのため、①現在の千葉県の HIV カウンセリングの現状を把握すること、②HIV 感染者の心理的特徴を理解すること、を目的として設定し、調査を行った。その結果、①では HIV 感染者に対応するチームにはまだ心理士が組み込まれていない病院が多数存在することが示された。その背景には心理士がどのような役割を担い、何のために HIV 感染者と関わるのか、という点が明確になっていないことの影響が考えられた。また、心理士側にも HIV 感染者への「わからなさ」が存在すると考えられ、HIV 感染者の持つ心理的特徴を明らかにすることが、地域の心理士の HIV 感染者への理解を促進すると思われた。②では①の考察を踏まえ、HIV 感染者を対象とし、ストレス・コーピング、抑うつ、不安に関する質問紙を実施した。ストレス・コーピングの特徴として、対処行動自体が抑制的であることが示された。また、HIV 感染者の精神状態として、抑うつや不安が高い者が存在することが明らかとなったが、特に、肯定的な認知的解釈や積極的問題解決の抑制が関わっていることが認められた。これらのことから、HIV 感染者への支援として、カウンセリング等での心理面および認知行動面へのアプローチが重要であると考えられる。

今後は得られた研究結果を千葉県内の地域の病院や、そこに勤務する心理士に伝える機会を持つために働きかけることが重要であろう。

A. 研究目的

メンタルヘルス部門では､「地域の病院に一人で勤務している心理士であっても、HIV の感染者が患者として受診した時に対応できるようにする。そのための情報を地域に提供する」究の大目的としている。そのためには HIV 診療体制の中で心理士が担っている役割や、心理が HIV 感染者に関わることのメリットを明らかにする必要があると考えられる。2018 年の千葉県の HIV カウンセリングの現状を把握すること、②地域で HIV 感染者を見るときにどのようなことが問題になりそうかを検討すること、を目的に設定した。

その結果、千葉県内には HIV 感染者に関わる医療チーム内に心理士が含まれないこが多く、また心理士側が持つ HIV 感染者への「わからなさ」や「拒否感」があることが示された。また、HIV 感染者の中にはメンタルヘルスに問題を持つ一群が存在すること、感情のコントロールが難しい可能性が考えられることが示唆された。そのため､2020 年度は HIV 感染者を対象とし、メンタルヘルスについて現状を把握すること、そしてストレス・コーピングの傾向について把握することを目的とし、調査を行った。

B. 研究方法

2018 年度は、県内の HIV 臨床に携わっている心理士を対象としたグループインタビューを行い、4 名が参加をした。ハード面、ソフト面両方からの質問を設定した半構造化面接的インタビューを心がけた。インタビューの所要時間は 150 分ほどであった。

（倫理面への配慮）

分析は個人が特定されない形で行うこと、途中でインタビューを中止しても不利益が生じないこと、研究が終了し次第内容を破棄することを明記した。

2020 年度は、ストレス・コーピング尺度特性版を用い、HIV 感染者が嫌な出来事、困った出来事に直面した時の行動や思考について調査を行った。加えて、SDS（Self-rating Depression Scale）と STAI（State-Trait Anxiety Inventory-JYZ）も用い、現在の気分状態の把握を行った。

（倫理面への配慮）

倫理審査委員会で承認の得られた同意説明文書を研究対象者に渡し、文書および口頭による十分な説明を行い、研究対象者の自由意思による同意を文書で得た。

C. 研究結果

2018 年度は、インタビューの結果、ハード面では、HIV 感染者に対する心理士の働きかけはそれ

ぞれの病院でかなり異なっていることが判明した。ソフト面では、心理士がHIV感染者に会った際にどこをチェックし、どのような人であれば心理士との面接の必要性や、通院中断の危険性を感じているのかがリストアップされた。また、他科の患者との差異として依存的な面があるという指摘が相次ぎ、特に物質依存や糖尿病などの問題を抱えている人が多いという声も多かった。また、人と関係を築きにくい面や、感情のコントロールが悪い面があることも示された。

2020年度は、HIV感染者50名を対象としてストレス・コーピング尺度とSDS抑うつ尺度、STAI不安尺度を実施した結果、ストレス・コーピングの下位尺度（「感情表出」「情緒的サポート希求」「認知的再解釈」「問題解決」の４つ）の得点はいずれも、尺度標準化の際の参考となる平均値に比べて低かった。また、SDSの得点による分類では、正常範囲（~39点）25名、軽度（40～47点）17名、中等度（48～55点）3名、重度（56点～）5名となった。STAIは、平均値を算出し、それをカットオフ値として用いたところ、状態不安では9名、特性不安では11名が平均値より高い不安を示した。3つの尺度に年齢を加え、相関分析を行なった結果、SDSとSTAIの2下位尺度のそれぞれに正の相関がみられ、特にSDSと特性不安の間に強い正の相関がみられた。また、ストレス・コーピング尺度とSDS、STAIの間では、ストレス・コーピング尺度の「認知的再解釈」および「問題解決」は、SDS、STAIのいずれとも負の相関がみられた。一方、「感情表出」は特性不安や年齢との間において弱い正の相関を示した。

D. 考察

2018年度は、千葉県内のHIV感染者を診察する病院において、チーム医療の中に心理士のポジションがいまだに確立されていないこと、加えて、チームの中で心理士が担う役割が明確になっていないことがインタビュー調査により示された。一方で、HIV感染者のある一群には人と関係を築きにくい面や、感情のコントロールが悪い面がある可能性がインタビューの参加者の語りからは抽出された。メンタルヘルスの問題に関しては、心理士のカウンセリングが必要だという内容がインタビュー参加者全員から語られた。潜在的なメンタルヘルスの問題によって、現在通院や服薬が安定しているとしても、何かのストレスがかかった際にそれを自らの対処能力では扱いきれず、その結果気分が不安定になり服薬や通院に支障が出る可能性があると考えられた。HIV感染者に早い段階で心理士が関わり何かしらの介入をすることにより、通院の中断を防ぐことや、定期的な服薬を下支えする柱の一つとなる可能性も考えられる。加えて、心理士サイドのHIVに対する拒否感は今後地域でHIV感染者を心理士が見ていく上で大きな阻害要因になるであろうことが指摘された。ここにはHIV感染者への「わからなさ」が影響していることが考えられた。そのため、HIV感染者の心理的特性を明らかにすることによって彼らの基本的理解を促進し、HIVカウンセリングにおけるひとつの視点を提供する必要があると思われた。

2020年度は、上記の考察を踏まえ、ストレス・コーピング、抑うつ、不安に関する質問紙を実施した。抑うつについては、軽度～重度をまとめると、50%の者が抑うつ状態にあることが明らかとなった。また、重度の抑うつ状態にある者も全体の10%にあたる。また、不安についても、検査中の状態不安は比較的低いものの、日常での特性不安は、50%の者は不安が高い状態にあると判定された。一方で、これらの者のほとんどは精神科受診やカウンセリングなどのケアを受けておらず、HIV感染者の精神状態への対応の重要性が示唆されたといえよう。

ストレス・コーピングの下位尺度の得点はいずれも、尺度標準化の際の参考となる平均値に比べて低く、HIV感染者がストレス対処全般について積極的にコーピングを行なっていない様子が窺えた。特に、「認知的再解釈」や「問題解決」を行なわないことと、抑うつや特性不安の高さが関連していた。「認知的再解釈」や「問題解決」を行なわないということは、彼らは外的なストレスを受けた際に、それを良い方に考え直すことや自分にとってプラスになることを探そうとする（認知的再解釈）ことや、それを何とかして解決しようとする（問題解決）ことを積極的に行わないということである。HIV感染者の抑うつや不安の改善のために、こうしたストレス・コーピングの取り組みを支援する視点も有効と考えられる。また、特性不安の高さと「感情表出」の間にも関連が見られたことは、HIV感染者が示す感情行動の背景を理解し対処する際に役立つかもしれない。

E. 結論

HIV感染者に関わっている心理士へのイン

タビューにより、HIV 感染者にはメンタルヘルスの問題を抱える一群がいること、また、心理士側にも HIV 感染症への誤解や偏見、知識不足が起こりがちであるという課題が見出された。

また、HIV 感染者への質問紙調査によって、HIV 感染者のストレス・コーピングの特徴として、対処行動自体が抑制的であることが示された。また、HIV 感染者の精神状態として、抑うつや不安が高い者が存在することが明らかとなったが、特に、肯定的な認知的解釈や積極的問題解決の抑制が関わっていることが認められた。これらのことから、HIV 感染者への支援として、カウンセリング等での心理面および認知行動面へのアプローチが重要であると考えられる。

今後は得られた研究結果を千葉県内の地域の病院や、そこに勤務する心理士に伝える機会を持つために働きかけることが重要であろう。研修会などを実施することによって HIV 感染者の持つ心理的特徴を県内の心理士に伝えることが必要だと思われる。

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし